

商・岡田ゼミ



商学部・岡田ゼミの3年次生チームが「7大学α対抗プレゼンバトル2019」で優勝し、日産自動車による初のビジネスコンテストへの推薦が与えられた。

プレゼンバトルは玉川大学工学部主催。企業のビジネス課題に取り組んでいく各大学が合同でプレゼンテーション大会に挑む。4回目となる今年は7月13日に開催された。テーマは日産自動車「進化系車いす」についてプレゼンする岡田ゼミ生

7大学プレゼンバトルで優勝 近未来の車いす提案



優勝を喜ぶメンバーと岡田教授(前列中央)

運動能力が低下しても行動が制限されることなく、高齢者が外に出て活躍できる方法を模索した。

岡田ゼミは3年次生全9人で挑戦。年を取ってによる「2030年の日産の新しいクルマのビジネスモデル」。7大学と3高校の学生・生徒がエントリーした。

提案したのは進化系の車いす「Weib(ウェアイス)」。パワードスーツ型の車いすを想定し、空気が流れるようなものに腰掛けて移動できるほか、人工筋肉を搭載し、アプリから「走る」「踊る」などの機能をダウンロードできる。メンテナンスやコミュニケーションの場として日産の販売店を活用する。

大会では「Weib」の装着をイメージしてプレゼンを行った。日産社員らによる審査では「発想が面白く、プレゼンもいい。論理展開もしっかりしている」と高く評価された。

特典として、日産の新たなモビリティサービス「モビリティサービスタ」を企画、実行する「フューチャーモビリティコンテスト」へのシード権が与えられた。9月の本選に向け、清水谷さん、岡本梨奈さんら4人で挑戦。岡本さんは「プレゼンバトルでは、日産ならではの視点が欠けていたことが反省点。次はしっかりと取り組みたい」と意気込む。



企業賞のトロフィーを手にする石川ゼミの8人

商・石川ゼミ

2チームが企業賞

CSVビジネスアイデアコンテスト

マーケティングを学ぶ商学部・石川和男ゼミの3年次生チームが、「大学生CSVビジネスアイデアコンテスト」(7月13日、㈱メンバーズなど主催)に参加、四つある企業賞のうち二つを受賞した。

同コンテストは持続可能な社会を創造するビジネスアイデアを大学生が提案するもので、3回目となる今回は大手企業4社が参加した。

三井住友カードの「キャッシュレスで解決する社会課題」で企業賞を受賞したのは、大崎柚香さん、大久保賢一さん、木村俊介さん、萩原歩香さん。キャッシュレス化とコンビニでの募金に着目。決済時にカードに付与されるポイントの端数を募金に充て、ユーザーが社会貢献できるアイデアを提案した。大久保さんは「消費者・小売り・カード会社の三方よしの仕組み」と説明する。大崎さんは「議論を重ねることで新しいことをたくさん学べて楽しかった」と話す。

キリンホールディングアコンテストには全国のス賞は市原雅也さん、平林亮介さん、伊藤彩乃さん、井口奈保さんのチームが受賞。「社会をよくするためにキリンが得意なこと」というテーマに対し、プラスチックごみが問題となっているAS EAN地域での環境活動を提起した。容器のリユースシステムを導入、コンサルタント事業の導入まで踏み込んだ(市原さん)が評価された。

石川ゼミは約1カ月でアイデアをまとめた。「パワーポイント作成も、プレゼンテーションも初めて」と井口さん。石川ゼミは仲間や先輩、石川教授からのアドバイスを基に協力して成し遂げたので喜びもひとしおだ。

今後、ゼミ生は神奈川県学チャレンジプログラムなどで、マーケティングについてさらに理解を深めていく。



演習の一環で生ハムを販売するゼミ所属のベトナム留学生(奥)=7月7日



岩田ゼミ生が描いた看板

寄稿

経営・岩田ゼミ

生ハム 生産者サミット・フェスティバルに参加して

食を起点とした地方創生をテーマに活動している経営学部・岩田弘尚ゼミの3年次8人が7月6、7日に長野県軽井沢町で開催された「国産生ハム生産者サミット」「国産生ハムフェスティバルin軽井沢」に参加した。岸みずほさん、高橋末智さんの2人に活動の様相や成果を寄稿してもらった。

調査研究活動でも成果

岩田ゼミは、長野県にあるドリムウィングス株式会社(DW社)と産学連携を行っている。DW社は、主にチョウザメやメゾン・デュ・ジャンボン・ド・ヒメキ(長野県)製の生ハムを扱う地域商社である。

3回目となる「国産生ハム生産者サミット」に参加したゼミ生は国産生ハムの生産に関わる人たちから、長期熟成して作られた国産生ハムの品質の高さや、生ハムの魅力を伝えたいという強い思いを聞いた。国産生ハムを食べてみると、驚いたことに一つとして同じ味はなく、口どけやうまみ、風味までもがさまざまであり、そのおいしさに感動した。私たちは、少しでも生産者の役に立ちたい、国産生ハムの魅力を多くの人に伝えたいと感じた。

翌日開催された国産生ハムフェスティバルは全国各地から集まった13工房が、原木から切りたての生ハムに伝えたかった。

一連の流れを通じて、途中で諦めないこと、余裕のある計画や行動をすること、また互いを理解し行動していくことの大切さを学んだ。

今後は、アカウンティングコンペティションで良い成績を残すことを目標に、研究を重ね活動していく。

また、活動の集大成として、後期には生ハムを使って商品開発をし、10月5、6日に長野県で開催されるイベントで販売する。その中で、自ら考えて行動する力やチームで協力して活動する力、そして社会人としての関わりの中でビジネスマナーを身につけ、自身の社会人基礎力を高めていきたい。

(岸みずほ、高橋末智)